2024～2025　　国際ロータリー第 2730 地区

週報　佐土原ロータリークラブ

The Magic OF Rotary

RI テーマ
ロータリーのマジック

会　長：　小牧　義隆　副会長：福島　城史　RI2730　地区ガバナー　笹山　義弘
幹　事：藤浪　淳志　会計：田辺　浩嗣　　中部グループガバナー補佐　戸高　勝利
事務局：押川　有里　会報委員：杉尾　一樹　RI 会長テーマ　ロータリーのマジック
例　会　場：ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ　　2730 地区スローガン　「ロータリーのマジックで
ロータリー楽しもう」
例会場住所：宮崎市大字塩路浜山　　例会場 TEL ：0985-21-1133・FAX　0985-21-1144
事務局住所：宮崎市神宮東 2 丁目 6-26　TEL0985-72-7600　FAX0985-72-7600

第 1686 回例会　　令和 6 年 10 月 2 日(水)

＜今日のプログラム＞

1.点　　鐘　　会長　小牧　義隆　君
2.ロータリーソング　♪　手に手つないで　♪
3.4 つのテスト　　本日の担当者より
4.会長の時間　　会長　小牧　義隆　君
5.幹事報告　　幹事　藤浪敦志　君
6.出席報告　　出席委員より～
7,委員会報告
8、セレモニー
9、10 月フォーラム　各委員会
11.次週例会案内　　SAA より
12.点　　鐘　　会長　小牧義隆　君

第 1685 回例会記録　　令和 6 年 9 月 25 日（水）

■会長の時間　　会長　小牧　義隆　君
皆さんこんにちは、今日は夜間例会です。
■幹事報告　　幹事　藤浪敦志君
幹事報告はありません
■出席報告　　岩切正司委員
本日の出席は 12 名　46％です。
■親睦委員会　　今日は田島に於いて夜間例会です。観月会の予定ですが、満月のタイミングが合いませんでしたが、楽しく歓談して、親睦を図ってください。

職業は奉仕のための場

岩切章太郎（宮崎）

職業奉仕とは

ロータリーの四つの奉仕の内で、一番わかりにくいのが職業奉仕だ、わかったようで、どうもよくわからぬとよくいわれる。何故だろうか。
それは職業奉仕が、自分の職業をどう考えるかという根本問題に関連するからではないだろうか。私どもは“奉仕こそ我が勤め”という言葉をよく口にする。しかし実際に日常の業務を遂行する場合には、その通りに行かない場合がかなりある。また自分自身を顧みても、果たしてロータリーの職業観に徹しているかどうか、それも簡単に言い切れぬところが多い。そんなことから、職業奉仕自体までも、わかり難いものになってくるのではないだろうか。

ロータリーの掲げる四つの奉仕は、いずれも住みよい世の中を作り上げるのが目的である。

ところが四つの奉仕の内、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕の三つは、「奉仕」の前に「・・・・に対する」と四字入れてみると、その意味が一層よくわかるが、職業奉仕だけは違っていて「・・・・に対する」と四字を入れると、職業に対する奉仕となって、かえって意味が分からぬことになってしまう。

これは前の三つは、クラブ、社会、国際がそれぞれ奉仕の目的であるのに、職業奉仕の場合は、職業は目的ではなく手段であるからである。ところで職業を通じての奉仕ということになると、当然のことながら、一体、職業とは何ぞや、という根本問題が出てくる。そして同時に、自分の職業をどう考えるかということが、第一の問題となってくるのである。

変転する職業

ある人が、近頃急に多くなったものは、ガソリンスタンドとドライブインだといったが、全くその通りで、ここにも出来たのか、と驚くぐらい次から次と建っていく。近頃はモータリゼーションの時代といわれ、自動車が急激に増加して、農村でさえも一家２台の自動車というのが普通になりつつあるのだから、必要が需要を呼び興し、その需要に応じた新しい職業として、ガソリンスタンドとドライブインが生まれるのは当然のことである。

いつだったか、最近の五十年間に、アメリカ国内の職業にどんな変化が起こったかを、極めて面白く書いた記事を読んで、こんなにも沢山の新しい職業が生まれ、こんなにも沢山の職業が消えてなくなったのかと、驚いたことがあったが、何もアメリカを例に引くまでもなく、私どもの周囲を見廻すと、消え去った職業、新しく生まれた職業、余りにも世の変遷の大きいのに驚くばかりである。

職業は奉仕のための場

こう考えてくると、すべての職業は、世の中の必要のために生まれ、必要のために存在するものであって、決して私のためにあるものではないことがすぐにわかるのであるが、妙なもので、私どもはとかく、自分の職業を自分のためのものと考えて、生活のためとか、金儲けのためとか、あるいは立身出世をするためとか、自分勝手な考え方になりやすいのである。しかし、ロータリーの考え方はそれとは少し違っているようである。

では、ロータリーでは職業をどう考えているのだろうか。

ロータリーの文献を見ると、例えば“奉仕とはわがつとめ”の一番初めのところに、「職業奉仕は何人といえども、あなたに代わってすることのできないものである。それは、ロータリーの綱領に宣言せられているように、あなたのクラブの最も重要な目的であります」とか、または「自己よりむしろ奉仕を、あなたの仕事における原則、方針及び行動の基礎とするという義務を伴うものである」とか、書いてある。この考え方からすると、どうしても職業は生活の為でも、金儲けのためでもなくて、奉仕のための場であるということになるのである。

仕事に誇りと喜びを

ロータリーでは職業奉仕のことを、ヴォケーショナルサービスといっているが、ヴォケーションとは神に召されるという意味だそうであるから、日本でよくいう天職という考え方と同じである。

神様の思召によってこの仕事をしているのだ、天から自分に与えられた仕事であると考えて、その使命を全うして行こうとすることは、ロータリーの精神であり、また日本の考え方でもある。そして、こう考えることによって、初めてじぶんの仕事に誇りと喜びを感ずることができるのである。こうなると、ロータリーの職業奉仕は、自分自身を省みて、自分はこのロータリーの職業観に徹しているかどうか、の反省から出発しなければならぬことになる。

江戸時代のことであるが、大阪のある大問屋のご主人が、ある晩、店先で大福帳を帳合しておられるところへ、あるお寺の住職が訪ねてこられて「ご主人、精が出ますね、何をしておられる」と声をかけたら、そのご主人が目を上げて「大般若心経を転読しておりますわい」と答えたという有名な話がある。このご主人にとっては、算盤をはじくのは金儲けのためではなくて、仏の業を満たすためであったのである。「船をおき橋を渡すも布施の壇度なり、治生産業もとより非ざることなし」いう有名な言葉があるが、昔はこういった気持ちで商売をしていた人も沢山あったのである。「この秋は雨か風かはしらねども、今日のつとめに田草とるなり」と自分の仕事を転職としていそしんでいたお百姓さんもあったし、医は仁術であり、先生は聖職として尊敬された。それらを通して流れている考え方は、すべてこのロータリーの職業観と非常によく似た考え方であると言って良い。

何ごとも修業のため、社会のため

私は若いころ、破産銀行の整理を担当したことがある。破産銀行の整理などというものは、全く嫌なもので、株主や預金者からいじめられるのは当然であるが、債務者からも散々に避難される。全く四面楚歌の苦しい立場であるが、その時いつも行員に話したことは二つの目的ということであった。　我々は今、破産銀行の整理という厄介な仕事をしている。生活のためと思ったらとても耐えられないが、他に二つの目的がある。　一つは就業のためであり、今ひとつは社会のためである。修業のためと考えると、すべての債務者、すべての預金者が、私を修行させるために苦しみを与えているのだという気がして、時には勿体ないと思うことさえある。

また社会のためと考えると、いま宮崎県で一番大事な仕事は、この銀行の整理であるから、特に選ばれてこの一番大事な仕事をさせられているのだ、という誇りと喜びとを感ずることができよう。そしてこの私の考え方にすべての行員が共鳴して働いてくれたお陰で、さしもの難関を見事にやりぬくことができた。この思い出は私に非常に大きな力を与えてくれた。　また、私の本業は宮崎交通というバス事業であるが、このバス事業も大正十五年、時の警察部長から宮崎市民の足のために引き受けて貰いたいという委託を受けて始めたもので、終始一貫、市民のため県民のための足としての使命を果たすことを目標としてきた。そして「宮崎交通があってよかった。宮崎交通であってよかったと喜ばれるような会社になりたい」というのが、宮崎交通のモットーになっている。この文章の中にある「が」と「で」の二文字は、特に深い意味を含んだ文字であるが、そのためでもあるまいが、独占事業でありながら横暴でなく、いいサービスの会社と言っていただくようになったのも、この「が」と「で」を深く味わってきたためではないかと思うのである。

ロータリーの職業観と「明行足」

ロータリークラブにはイイところが沢山ある。しかし、この内でも私が一番心をひかれるのは、このロータリーの職業観である。それは私の職業観と余りにもよく似ているからである。そしてどれくらい力づけられてきたかわからない。私はいつもロータリアンになってよかったとしみじみ思うのである。　しかしロータリーの職業観でも、ただ頭で考えている間は非常に簡明であるが、自分の仕事の上に引き取って実際問題に当てはめてみると、そう簡単なことではない。いろいろと矛盾や悩みが山積してくる。それを一つ一つ片付けていかないことには、本当に自分の信念になってこない。こんな時、私はいつも明行足という言葉を思い出すのである。　明行足とは釈迦の十号の一つであって、お釈迦様の知恵をたたえた言葉である。私どもの知識はただ知っているだけだが、お釈迦様の知識は、明と行とが共に備わっている。明行倶足だというのである。あるドイツ人が、明を体験、行を体現と訳したそうだが、全ての知識もただ知っているだけではだめで、体験によって深め、体現されるまで高めなくてはならぬであろう。ロータリーの職業観もまた然りである。

奉仕こそわがつとめ

最後に“奉仕こそわがつとめ”の中から、いくつかの文章を引用して、近頃の世情を反省する資料にしたいと思う。

一、　苦役か奉仕か。　それこそすべての人々が仕事に取り掛かろうとするときに直面する日々の選択課題である。自分の職業をどのように見るかが最も重要である。

二、　奉仕こそわがつとめであるという見解こそ職業奉仕の最も簡明な理解である。我々は単に自分に問えばいいのであって、そうすればそれが何を意味するかが、はっきりわかるのである。

三、　職業奉仕こそロータリーの挑戦である。これこ

そ、世界中の数多くの団体の中で、ひとりロータリーが特異な存在となっている重要な特徴である。職業における奉仕というロータリーの考え方を、今日ほど必要とする時代は未だかってなかった。この世の中におけるロータリーの存在意義はここにあると言っても、おそらく過言ではないだろう。

ロータリーの友　一九六九年五月号

宮崎RC定款細則に添付されている資料を掲載しました。　藤堂孝一